

農 業 躍 進 の 方 向

農林大臣官房技術審議官 原 政 司

20世紀における欧米農業は、まず機械化改革にはじまり、次第に化学物質等の利用による農業集約化の方向で発展してきた。すでに耕地の外延的拡大が困難になった彼地の農業にとって、既存耕地の集約的利用がとりあげられるのは、まさに当然のことである。

これらの欧米農業の発展方向に対して、わが国の場合は、古来耕地が狭く、かつ分散しているので、明治以来の農業改良も、もっぱら肥料等集約化の方向で反収を高めることを主眼として進められてきた。

昭和30年以来の高度経済成長の下で、農業就業人口は減少を続けているが、その間の農業技術の動きは、益々資材・施設の高度利用の度合を強め、機械化も小型機械利用でしかも反収に支障のない範囲で進められ、農業技術の基本型は一向に変っていない。今後、わが国の工業化は一層進み農業就業人口は益々減少するであろうから、将来はこれまでのような小型機械の

部分的利用という段階を脱却して、中型・大型機械利用の段階に発展することは当然のことと推察される。しかし、将来かなりの規模にわが国農業経営が拡大されようとも、規模の農業だけで諸外国に対抗できるとは考えられない。

おそらくは、機械化による高能率化と同時に高い生産力水準の農業が将来とも期待されるであろうと思われる。

このような意味で、化学物質の利用による農業の改良は、省力と増産をめざして将来ともわが国の中心的課題と考えられる。ことに、化学物質の利用は、ひとり生育場面だけでなく、収穫・貯蔵・加工等広い分野において、また省力の面で活用されるものと期待される。

しかし、このような農業技術開発の分野は、化学工業方面の進歩にまつことが不可欠であるので、今後一層農業技術者と工業技術者との連携いと協力を期待したい。

新 年 の 挨 拶

農業工業会会長 北 原 敏

明けましておめでとうございます。

日本植物調節剤研究協会発足以来、4年目の新

春を迎えるに当たり、皆様と共に心からお祝い申し上げます。